

中村本『夜寝覚物語』の創作：改作についての覚え書き

坂本，信道
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/11983>

出版情報：語文研究. 61, pp.21-28, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

中村本『夜寝覚物語』の創作

—— 改作についての覚え書き ——

坂 本 信 道

中間と末尾に大きな欠巻をもつ『夜の寝覚』は、これまでの研究によってほぼ全体像が明らかになった。中世における改作本である中村本『夜寝覚物語』(以下、中村本と略す)も、『拾遺百番歌合』『無名草子』『風葉和歌集』とともに、原作復元の資料として重視されてきた。しかし、その反面、中村本自体を一個の独立した作品として扱うことはあまり行われていない。これはひとつには、中村本の改作が原作『夜の寝覚』(以下、原作と略す)の省略・縮小であり、梗概化に過ぎないという見方があるからであろう。たしかに、中村本は筋本位で単純明快な反面、原作のもつ情緒は幾分失なわれていると言える。しかし、それゆえに価値が劣ると判断するのは早計であろう。中村本の冒頭は、「紫藤の露の底の花の色衰へ」云々と、『和漢朗詠集』所載の源相規の漢詩句を踏まえて『狭衣物語』に倣った書き出しを取り入れたり、

すぎずきしき人々、東山のほとりにをかきすまひあるに集まりて、連歌・和歌の会などはなかなかなりとて、古き物語や草子の中におぼつかなきことどもを言ひ合はせつつ(下三頁)

と、『無名草子』『筑波問答』等の評論や、『大鏡』以下の歴史物語に

多い座談会形式を新しく加えたりしている。他にも中村本独自の創作はあるはずであり、本稿では、中村本を具体的に検討し、その改作について考えてみることにする。

—

原作の巻四に於いて、女主人公寝覚上は、美しく成長した我が子、石山姫君と対面する。石山に籠って密かに産み落として以来の、初めて母娘対面である。この感動的な場面は中村本にもそのまま残されているが、そこに至るまでの経過は変えてある。中村本と原作の梗概を対比させると次のようになる。

中村本	原作
①石山姫君が恋しがっているのを理由に、主人公は寝覚上を自分の邸に迎えようとし、寝覚上の兄中納言に相談する。	(原作にはない部分であるが、後出の原作②と類似する。)

<p>また寢覚上自身も、入道の指 示を仰ぐように言う。</p>	
<p>② 主人公は寢覚上を迎えること を寢覚上の父入道に提案、承 諾される。</p>	<p>(原作には全くない。中村本が 新しく作った部分)</p>
<p>③ 寢覚上、宮中から退出し、主 人公邸に移り住む。</p>	<p>⑦ 寢覚上、言い寄る帝から逃れ て宮中から退出。亡夫老閑白 邸へ戻る。(巻四・二六三頁)</p>
<p>(中村本にはない)</p>	<p>⑧ 石山姫君が恋しがっているの を理由に、主人公は寢覚上に 主人公邸に移るように勧める が、寢覚上は聞き入れない。 (巻四・二七七頁)</p>
<p>④ 主人公邸へ退出して来た寢覚 上は、そこで待ち受けていた 石山姫君と対面する。</p>	<p>⑨ 寢覚上が主人公邸へ移ること を承知しないので、仕方なく 石山姫君を故老閑白邸へ渡ら せ、寢覚上と対面させる。(巻 四・二八五〜二九〇頁)</p>
<p>⑤ 寢覚上のもとに帝より文あ り。主人公は帝と寢覚上との 関係を疑う。</p>	<p>⑩ (原作・中村本ともに同じ。 巻四・二七二〜二七五頁)</p>

原作と中村本とを比較すると、内容が若干変えられているのもさることながら、話の順序が入れ替えられていることがわかる。中村本で原作と順序が異なっているのは、ここを含めて二箇所しかない

く、そのほかは内容の改作のみである。改作者は、寢覚上と石山姫君との対面④を順序を変えて原作よりも前にもってきており、その④に至るまでの部分をも改作している(①②③)が、それらの一連の改作から④へと続く改作について検討してみることにする。

まず、寢覚上の退出③であるが、これは原作の⑦と対応する。ただし、原作では、寢覚上は主人公邸に隣接する亡夫老閑白の邸に退出するのであり、その後も主人公にはなびこうとせず、主人公と一緒に住むようになるのは父入道にすべての事情をうちあけてからである(巻五・三三九頁以降)。中村本③では主人公と寢覚上の婚儀のこととは一切描かれていないが、後の本文には、

殿は御ありきもなく、御簾の外にもおぼろげならでは出で給はず起き臥し、いにしへのあはれ、中絶えにしつらさに、今さら契りを添へて、明くも知らず臥し給ひて、(途中、和歌二首略)かやうにて、今は思ふさまなる御なからひ、めでたしと言へばおろかなり(下一八二頁)

など、二人が幸福な日々を送っている姿が描かれていて、③の退出先を変更した時点で、改作者は既に主人公と寢覚上の結婚を想定していたことがわかる。結婚を原作より早くしたのは、幸福な結末を意図しての改作であると考えられ、③は中村本の新しい構想に沿った改作なのである。

次に、寢覚上を主人公邸に迎えようとする①と父入道への相談②はどうであろうか。①は原作②と類似する。②が材料になっているとも考えられる部分である。ただし、主人公邸へ移ることについて、「人目見苦しからぬほどに、入道殿などにも聞こえあはせ給へ」(下一六二頁)と、中村本では寢覚上自身の承認も取られていて、懷妊

のためやむなく広沢から連れ戻される原作と好対照をなしている。

②は中村本の創作であり、②の補入により、主人公と寢覚上の結婚
③は話の展開上、不自然になることを免れている。宮中を退出しよ
うとする寢覚上は、父入道の許しを得て、晴れて主人公との仲が認
められ、主人公邸に移り住むという流れになっていくからである。

こうして見てみると、①②③はいずれも幸福な結末を意図した、
新しい構想に沿った改作であるといえる。これらの改作を受けて④
の母娘対面は置かれ、原作とは異なった順で並んでも不自然でない
ように工夫されているのである。中村本④に対応する原作⑤は、前
掲の表からもわかるとおり、原作ではもっと後の方にあるのだが、
姫君との対面は一時的なもので、中村本のように寢覚上と姫君が常
に一緒に住んでいるのではない。原作では主人公と寢覚上が結婚し
ていないからであり、この点だけを見ても、中村本が結婚③を置い
て、改作した④の内容が唐突なものにならないように改作している
ことがわかる。母娘対面④は、寢覚上が主人公邸に移る①と同様、
物語を幸福な方向へ大きく進める改作であり、前に連なる①②③の
改作と併せて、内容が自然に続いて破綻のないようにまとめられた
改作であると言えよう。

二

原作巻五に、主人公が自分と寢覚上との関係を、寢覚上の父入道
にうちあける場面がある。この場面は中村本にも詞章を同じくして
残されていて、筋の上では何の改変も行なわれていないのである
が、話の順序は大きく入れ替えられている。

中村本	原作
①主人公と寢覚上結婚	(結婚は巻五・三三九頁以降 で、内容も異なる。)
②寢覚上懐妊(下一八七頁)	内容同じ。(巻五・三五五頁)
③尚侍懐妊(下一八九頁)	内容同じ。(巻五・三八二頁)
④寢覚上の安産の祈りを始め る。父入道もこれを知り、様 態を心配する。(下一九三頁)	(原作にはない。中村本の創 作。)
⑤父入道呼び寄せて寢覚上を 励ます。入道は尼にすること を提案するが、主人公は認め ない。(下一九七頁)	(原作にはない)
⑥寢覚上、女兒を出産する。一 同喜ぶが、中でも入道の喜び は格別であった。(下一九九 頁)	寢覚上、男児を出産。(巻五・三 八七頁)
⑦父入道に主人公と寢覚上のこ れまでの関係をうちあけ、入 道を石山姫君に対面させる。 入道は今まで気付かずにいた ことを詫げる。(下二〇三頁 二〇六頁)	原作も同じ。中村本には省略は あるが、詞章も原作のほぼその まが使われている。(巻五・ 三四〇〜三四九頁)
⑧司召に、主人公一族揃って昇 進する。(下二〇八頁)	官位に違いはあるが原作も同 じ。(巻五・三八五頁)

⑨寝覚上、入道にすべてを知られたことを恥入る。(下二〇九頁)	内容ほぼ同じ。(巻五・三三三頁)
⑩尚侍、若宮を出産。(下二二〇頁)	内容ほぼ同じ。(巻五・三九三頁)

対照表からわかるとおり、原作と同じ順で進められて来た物語は、父入道にうちあける場面⑦に至って、突然、前に戻され、尚侍の出産⑩以降、また原作と同じ順序になる。途中、⑧も原作ではもつと後にある部分を前にもってきているが、⑧は官位昇進という、内容にはあまり関係のない部分である。むろん、幸福な結末へと急ぐ意図はあったと考えられる。⑦以降の順序の変更を改作者が意図しなかったもの、すなわち、改作者が見た原作の本文に乱れがあったためと見做すことは無理であろう。現存する原作の諸本には、そのような乱れをもつものは一本もないうえ、改作者が見たとされる本文は現存のものより一層良好なものであったと考えられるからである。結論から言うと、意図的な改作であるにもかかわらず、⑦の部分の改作は、順序を入れ替えたために話の流れが不自然になり、内容に矛盾を生じているのである。

中村本で最も不自然なのは、入道にすべてをうちあける⑦の前に寝覚上の女兒出産⑥が起こる点である。

中村本は既に①で主人公と寝覚上が結婚するように改作しているのだから、原作では入道にうちあけて結婚したあとにくる寝覚上の懐妊②が、⑦より前にもって来られたことはまだ納得できる。父入道の許可を得て正式に結婚し①、懐妊する②という順になるからで

ある。その後に尚侍の懐妊③を続けたことも、原作通りの並びであるから、原作を横に置きつつ改作を進めていったと思われる中村本としては当然の結果とも言える。つまり、改作者が主人公と寝覚上の結婚①を繰り上げたことは、幸福な物語への改作という構想の上からは首肯できるのであり、それに続いて懐妊②・出産⑥を置いたことには不自然な点はなく、ここまでの改作は破綻なく行なわれていると言いうことができる。

中村本が不自然になってしまったのは、その後、入道へうちあける場面⑦を続けたためである。長くなるので逐一の引用はしないが、⑦の部分について中村本と原作とを照合すると、中村本には省略はあるものの、原作の詞章がほとんどそのまま用いられていることがわかる。つまり、原作と同様に中村本でも、主人公と寝覚上の関係はそれまで全く秘密にされていたことになっているのである。また、事実を知らされた入道の発言も、

(原作)

入道殿、すべてすて目も口もひとつになる心地し給ひて、あさましきに、とばかり物もいはれ給はず。

「あはれ、かかりける事どもを夢の中にもわが知らで(後略)」
(巻五・三四三頁)

(中村本)

入道殿聞き給ひてあきれ騒ぎ思すに、とみに御いらへも申し給はず。ただ、

「あはれなりける事を夢にも知らずして(後略)」(下二〇四頁)と、原作も中村本も、入道は二人の関係を初めて知ったように書かれている。ところが、これは中村本が前に改作した内容と合わなく

なっているのである。

中村本では、先にも述べたように、入道へうちあける場面⑦より前に、寢覚上の懐妊②・出産⑥が来るように改作されているが、そこで新しく補入された入道の言動は次のようになっていた。②では、

⑦広沢の入道殿は、

「つれなくながらへて、またいかなる目を見ればべき」
と心を尽くし給ふ。(下一九三頁)

と、入道は、妊娠に悩む寢覚上の容態を早くから知って心配しているのである。また、⑥では、

④色々の祈りなどし給ふに、からうじて生まれ給ひぬ。言ふ限りなく喜びあひたるに、入道殿などはあさましきまで喜び・泣きどもし給ふ。(下一九九頁)

と、寢覚上の安産を限りなく喜んでゐる。これらの言動は、あきらかに主人公と寢覚上の夫婦関係を認めているのであって、入道へ主人公と寢覚上の関係をすべてうちあける⑦より前にあるのはおかしいことになる。

ところで、中村本では、先に、主人公が寢覚上を主人公邸に迎えることを提案し、入道に申し出るように改作した箇所がある(下一六〇頁以下)。そこで入道は、

②さやうに(寢覚上が主人公ノ所へ)移ろひ給はん事も、人のもの言ひいかがおぼゆ。また、さほど思はんをのがれても、おのずから世の中恨めしく思ひがけぬ事も出で来んは、品下り口惜しき事もあるべし(下一六三頁)

と述べている。世間の評判を気にしているのは、以前から主人公と寢覚上の仲が噂されていたからで、その噂どおり主人公のもとへ

移った後の評判を心配しているのである。この部分で、入道は二人の関係を知ったと考えられるのであり、ここで与えられた入道の承諾により、二人は一緒にになるのであって、⑦の前後の改作は、懐妊②・出産⑥の伏線となっている。寢覚上の懐妊②・出産⑥は前に行なわれた改作に従っているのであり、その折の入道の言動⑦・④も幸福な結末を意図した新しい構想に合致している。話の運びの上で、何の不自然な点もないのである。

それに対して、⑦の記述は、新しい構想に沿った改作を前にもって来たにもかかわらず、依然、原作のままの詞章を用いているために、話の順序・内容に矛盾が生じ、自ら行なった改作と合わなくなっているのである。本稿の二で述べた石山姫君と寢覚上の対面の場面の改作に比べて、この箇所の改作はあまりうまく行っていないと言うことができる。

このような改作の不手際の原因を推定することは困難だが、次のようにも考えられる。

中村本は後半になるにつれ原作から離れて改作が激しくなるが、大きな改作を行なう際に原作の記事の前後を取り違えたこともあったのではないかと。本稿の二で触れた改作箇所⑦の⑦の入道にすべてをうちあける場面と似た場面がある。主人公が入道へうちあけて、寢覚上を自邸に迎えることを承認してもらおうという場面である(下一六二～一六四頁)。⑦は原作のままのもので、後に入道と石山姫君の対面が続く、もう一方は、二人の結婚を繰り上げるための中村本独自のもので、入道と石山姫君の対面はない。このような相違はあるものの、入道へうちあけるといふ、似たような場面が、中村本には二回あるのである。この類似した二つの場面が、いずれも順序

が入れ替わっている部分にあることは意味なしとは言えまい。原作からヒントを得て、中村本はまず、父入道の承認を得た上で主人公と寢覚上の結婚が早くなるように改作したが、そこで石山姫君と入道の対面を書かなかつたためか、あるいは既に使つたのを失念していたためか、原作の同じ所をもう一度、今度は原作のまま⑦として置いてしまったのではないだろうか。中村本の後半は、原作の順序を入れ替え、その上に話がうまく通じるよう内容を変えているから、その作業過程でこうした重複が起こることも充分に考えられるのである。

三

最初は省略・縮小という方法をとり、原作に忠実であつた中村本も、途中、朱雀院の女一宮を齋院に立たせて主人公への降嫁をとりやめるといふ大きな内容の改変を行なつて以降は、男女主人公の幸福を描くといふ新しい構想に沿つて改作を進めている。このことについては永井和子氏が、

始めは漠然と筆を進めて行つたが、次第に複雑さと長さに思い至つて短篇化を志し、従つて終末も大団円に終つたものと見ておきたい。

と、中村本の構想が途中で変更されたことを述べておられる。まさにそのとおりであるが、それではどのあたりから構想を変えて幸福な結末を意図するようになったのであろうか。以下、順を追つて考察してみることにする。

原作の冒頭では、天人が降り寢覚上に琵琶の秘曲を伝え、寢覚上

の将来について、

「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱し給ふべき宿世のおはするかな。」(四八頁)

と予言を残して帰り、以後の物語はそれに従つて進行する。中村本でも原作と同様の予言があり、物語は寢覚上の不幸な生涯の物語として語り始められる。その冒頭での天人の予言を、寢覚上が兄の宰相中将にうちあける場面が中村本巻二にある。

さやうの天の葉、まさにひがごとあらんや。物思ふべき宿世のおはずと教へけんさへ違はず、またの年と契り給ひけんも確かなり。これ思ふに、この御物思ひ始終あるべくは、何かは「伝ふべき人もなし。君ばかりこそと思ふ」とて、ふたとせまでおはして残す手なく伝へ給ふべき。(上一三九頁)

この宰相中将の心中思惟は、寢覚上の運命が予言どおりになっているのを確認し、秘曲など伝授してくれなくてもよかつたのにと悔やんでいるもので、この時点では中村本も依然として寢覚上の悲運の物語であり、構想も原作のままであると言える。

物語が進んで、寢覚上が老閑白に嫁する日が近くなつた頃、主人公は再び寢覚上と密会する機会を得た。そこで主人公は将来を暗示する夢を見る。夢解きを行なわせると、

あめの下、並びなく賢くすぐれ給へる男児ぞいできおはしまさん。ただし、それをよそにや聞き給はんずらん。さりとも、つひには御手に得たてまつらせ給ひてん(上一九五頁)

と言う。以後、中村本ではこのとおりになり、生まれた男児(原作のまさこにあたる)はやがて主人公の所に引きとられるという幸福な形へ発展する。しかし、原作でもまさこは主人公に引きとられる

から、この夢の部分の中村本独自の改作だとは断定できない。むしろ、原作にもあったと考える方が妥当である。ここでもまだ、構想は原作のままと考えてよいだろう。

それに続いて中村本巻二で、寢覚上が我が身の憂さを嘆いている場面がある。そこでの寢覚上の和歌は次のようなものである。

いやがうへに憂きことのははつれども誘ふ風だにあらばこそあらめ(上一〇一頁)

この歌が『古今集』の小野小町の歌、

わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

を踏まえていることは疑いがない。小町の歌は、現在のつらい状況からすっきり抜け出して、誘う人があればついて行こうと思うというような歌であるから、中村本の和歌も同様に解すべきであろう。

寢覚上は主人公からの誘いを待っているのだと言える。一方、原作の方はこの部分は欠巻であり、該当する歌は見いだせない。しかし、従来の研究により、次の和歌が対応するものであると指摘されている。⁸⁾

世の中にふれば憂さのみまさりけりいづれの谷に我身捨ててん

〔風葉集〕雑二)

寢覚上は主人公との関係をつらく思っ^て世を捨てようと考え、主人公との縁を切ろうとしている。原作と中村本は反対なのであり、この和歌の改作は、原作から離れて幸福な結末へと向かう新しい構想によるものと言えよう。このあたりで構想は変わっていたと思われるが、さらに確実になってくるのは、寢覚上と老閨白の婚儀が間近に迫った折の改作である。

①少将は、大納言殿よりの御装束・御扇、かの形見の御小袖などを、「かかりとも、もし御契りの朽ちせぬ折もや」とおぼえて、衣箱に入れながら人にも見せずしておきたり。(上一二一七〜二一八)

この部分だけでは構想の変化は窺えないが、後の本文と対照すると新しい構想が浮かんで来る。中村本巻五に、主人公と寢覚上が幸福を得た後、つらかった昔を回想する場面があって、そこと対応しているのである。

少将、また、「それよりの御文ども、みな取りおきて侍る。」とて取り出づるに、故殿の御もとへ渡し給ひし時、奉り給ひたりし御装束・扇、また石山にて着かへ給ひし御小袖を返し参らせ給ひし中の御文などは、取り分きて取り出でたれば(下一八三頁)

中村本のこのあたりは、原作の巻四の途中にあたるが、右の部分はその中には見えないもので、改作者が幸福な結末を意図して構想を変えたために新しく補入された部分なのである。①で、「かかりとも、もし御契り朽ちせぬ折もや」と少将に言わせ、形見の品々を捨てないよう^にしておいたのは、この部分で小道具として使うためなのである。こうした対応を見ると、巻二の改作①は後の展開を考慮して周到に準備されたものと言え、構想は確実に変化している^と判断できるのである。

本節の冒頭でも触れたように、改作者は中村本巻三で、女一宮の主人公への降嫁をとりやめて斎院に立たせ、原作後半での主人公と寢覚上の不幸の原因を取り除いている。これによって物語は幸福な方向へと大きく転換するのだが、幸福な結末を意図した新しい構想

へ変化したのは、それ以前の巻二の後半であったと言うことができよう。

四

本稿では中村本の改作を具体的に見てきた。従来、原作の梗概化に過ぎないと評価され、一個の作品としては軽視されがちであった中村本だが、個々の改作にはある程度の創意工夫の跡が窺えるのである。順序を改変するにあたっては、改作者は前後を読みこんだ上で新しい構想に必要な部分を原作から選び出し、創作を加えて自然に話が進むように仕立てている。また、主人公と寢覚上が後年巡り合うように改作するにあたっては、形見の品を小道具に使って劇的な趣向を加えるなど、よく考えられているのである。もちろん、全体として見ると、筋は単純明快になり、原作の特徴である綿々とした心理描写は削除されている。しかし、それを以って中村本自体を作品として価値のないものだとすることはできないであろう。

今とりかへばやとていといたきもの今の世に出で来たるやうに、今隠れ蓑といふものをしいだす人の侍れかし。

と『無名草子』に言うごとく、改作は読者の求める所であった。『住吉物語』とりかへばや』のように、物語の創作と享受が主として女房たちの手にあった時代の改作と、更に時代が降ってからの改作では質が異なるのは当然である。しかし、享受者の要求に応じて物語を改作する点では同じであり、改作物語が新作物語と同様に歓迎されたのは『無名草子』からも想像に難くない。中村本の改作事情も同様であったと考えられ、本稿で扱った改作や、冒頭部分の座談形

式の創作などは、改作者の改作に対する力の入れようを充分示しているのである。中村本が後半になって改作が甚しくなることについて、従来は、原作の煩雑を厭って原作を離れ、簡略化したという消極的な改作姿勢が言われている。しかし、そうではなく、時代の好尚に合った作品に仕立てるために原作を切りつめ、幸福な結末へと積極的に創作を行なったのではないだろうか。これまで触れて来たように、中村本の後半部分の改作は簡略化という以上のものが見られるようである。中村本については、物語享受の一形態としての改作を考える上での恰好の資料として、原作を離れて、独自の創作としての一面も考えるべきであろう。

注

- (1) 永井和子氏 中村本夜寢覚物語の素材 (学習院大学文学部研究年報) 第十輯 昭和三十九年二月
- (2) 中村本文の引用は古典文庫により、数字はページ数をあらわす。
- (3) 原作本文は日本古典文学大系により、数字はページ数をあらわす。
- (4) 人物の呼称は、原作と中村本の間には相異があり、また途中で変わる。女主人公の君を寢覚上、主人公権中納言を主人公に統一した。
- (5) 現存する原作の諸本にみられる錯簡の影響を中村本は全く受けていない。
- (6) この部分は本稿の一で触れたように、中村本が創作した部分である。
- (7) 永井和子氏「寢覚」の改作態度について (学習院国語国文学会誌) 六号 昭和三十七年五月
- (8) 鈴木一雄氏 神宮文庫本「よはのねざめ」について (国語) 三卷一 号 昭和二十九年四月。
- (9) 『無名草子』新潮日本古典集成